『現代』の研究 (補遺)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/32538

『現代』の研究（補遺）

奥田浩司

本稿では、これまでの研究を補っていきたい。まず新たに入手した研究文献から知見を得る。次に『現代』が発行された背景について、先行研究、資料を参照しつつまとめておく。最後に資料と若干の考察を付け加えておく。

一

これまで大正九年から一〇年にかけて、東京において発行されていた朝鮮基督教青年会の機関誌『現代』について調査・考察を重ねてきた。以下の論文がそれにあたる。

①「研究ノート　「文化政治」期の朝鮮語雑誌研究」」（『金沢大学国語国文』第三二号　平成一九年三月）
②「研究ノート　朝鮮語雑誌『現代』の研究（一）—文化統治期の朝鮮語雑誌研究—」（同第三三号　平成二〇年三月）
③「『現代』の「民本主義」—文化統治期の朝鮮語雑誌研究—」（同第三四号　平成二一年三月）
④「研究ノート　卞熙鎔について」（同三五号　平成二二年三月）
⑤「洪蘭坡「煩悩의一夜」（「煩悩の一夜」）について」（同三六号　平成二三年三月）

二

歴史学の分野において『現代』の研究が進められていることが分かった。下記にあげる小野容照氏の一連の研究では『現代』に言及しており、大変参考になる[1]。

①「福音印刷合資会社と在日朝鮮人留学生の出版史（一九一四～一九二二）」（『在日朝鮮人史研究』第三九号　二〇〇九・一〇）
②「在日朝鮮人留学生卞熙鎔の軌跡—在日朝鮮人社会主義運動史研究のための一視座—」（『二十世紀研究』第一〇号　二〇〇九・一二）

「福音印刷合資会社と在日朝鮮人留学生の出版史（一九一四～一九二二）」では、『現代』について次のように詳細に報告している。

在日本朝鮮基督教青年会（以下、朝鮮ＹＭＣＡ）の機関誌『基督青年』は、一九一七年一一月に朝鮮ＹＭＣＡ幹事の白南薫を編集兼発行人として創刊された月刊誌である。現存が確認できるのは、一九一八年三月発行の第五号から、同五月発行の第七号までである。イエスや聖書に関する記事をはじめとして、キリスト教に関する内容が大半を占める。第七号には内村鑑三や新渡戸稲造も寄稿している。福音印刷合資会社で印刷された朝鮮人の出版物の中で、唯一キリスト教出版物と呼べるものである。一九一九年一一月に第一五号を発行し、翌年の一月からは、白南薫を編集兼発行人として誌名が『現代』へと改題された。官憲資料に「「現代」ト改称スルニ及ヒ宗教的色彩ヲ脱シ」とあるように、『現代』に改題されて以降は、労働問題や、ラッセル、マルクスをはじめとする近代思想に関する紹介記事が毎号掲載され、朝鮮人留学生による学術誌としての傾向が強くなった。

（小野氏よって注記されているが、「官憲資料」とは「朝鮮人概況第三（大正九年六月三十日）」（朴慶植編『在日朝鮮人関係資料集成』第一巻（一九七五・九　三一書房）をさす）

小野氏の指摘によれば、『現代』は『基督青年』という宗教色の強いものとして出発したが、改名されて以降は近代思想に関係する記事が多く紹介されるようになった。ではなぜ誌名が変更され、記事内容が近代思想へと変容したのであろうか。

『現代』の背景には、三・一運動があると考えられる。「在日朝鮮人留学生卞熙鎔の軌跡―在日朝鮮人社会主義運動史研究のための一視座―」では次のように述べている。

朝鮮内で展開された三・一独立運動がひと段落すると、朝鮮内では独立運動の理論的模索期に入り、知識人による新しい理論や思想の積極的な啓蒙活動が展開された。朝鮮内と同様に、日本の朝鮮人社会においても、この時期に活発な啓蒙活動が展開された。その担い手は、二・八独立宣言が在日本東京朝鮮基督青年会館で行われたことが象徴的に示すように、社会運動への自覚の芽生えた在日本東京朝鮮基督青年会（以下、朝鮮ＹＭＣＡ）の主要メンバーたちであり、卞熙鎔（1920年6月に朝鮮ＹＭＣＡの会計に選定された）もそのひとりであった。／（略）1920年1月に誌名が『現代』に改題されると同時に宗教色が薄れ、近代思想の紹介記事が中心となった。誌名と性格が大きく変化したのは、朝鮮ＹＭＣＡのメンバーたちが、自分たちが生きている「現代」という時代を深く理解し、自分たちが立っている位置を良く知ったうえで、今後進むべき方向を見定める必要があると考えたからであった。

朝鮮基督青年会のメンバーに「社会運動への自覚の芽生え」がおこり、知的探求を開始したのである。それが『現代』へと誌名が変更された要因であった。

三

『現代』が三・一運動の影響下にあることは間違いないであろう。これから、関係する文献、史料によって時代状況を確認していく。小野氏も言及していたように、三・一運動に先立ち、東京の朝鮮人留学生によって「二・八独立宣言」が朗読されている。その時の状況について、姜徳相「二・八宣言と東京留学生」[2]では次のように述べている。

次に宣言文が発表された二月八日の事情を一月六日の大会で臨時委員に任命された田栄沢の談話を借りてもう少し説明しよう。「まもなく予定の二月八日がきたが、一方で宣言書を開会中の日本議会、各国大使館、内外新聞社に郵送した。一方で当日午後七時に神田猿楽町のキリスト教青年会館で留学生の予算総会と仮称して全留学生の召集をはかった。もちろん当初は学友会総会の会務も若干処理していたが、突然、会員中の一人が起ち、民族独立の情勢が緊迫していること、祖国の再建の近いことを論じて悲憤慷慨の演説をはじめた。また幾人かが続いて起ち激烈なアジ演説をした。臨席の警官がついに弁士中止の命令を発した。聴衆は暫時沈黙し静寂の気が流れた。まもなく嗚咽の声がせきを切って静寂が破れた。司会の崔八鏞はこの機会に、準備した独立宣言書を朗読し、独立万歳を高らかに叫んだ」(『新天地』一九四六年三月号)。／集会参加者は六百名に及んだ。当時の留学生の総数が六、七百名にすぎないことを考えると、六百名の集会はほとんど留学生の総意を結集したといっても過言ではない。

二・八独立宣言は朝鮮人留学生の総意と言って差し支えのないものであった。

また朴慶植「東京二・八宣言から三・一独立宣言へ」[3]では、二・八独立宣言と三・一運動の関係について次のように述べている。

在日留学生の二・八独立宣言は、具体的な独立運動に立ち上がった先駆としての意義をもち、国内の三・一独立運動に大きな影響を及ぼした。国内での三・一運動がおきると、在日留学生も運動に参加するために多くの者が帰国し、五月十五日ごろまでにその数は約三六〇名に達した(帰国総数は四九一名、このなかには女子学生も大勢いた)。女子留学生たちの東京女子親睦会では多額のカンパをおこなっている。

東京における朝鮮人留学生の独立運動と、京城での独立運動の間には緊密な繋がりがあり、多くの朝鮮鮮人留学生は、二・八独立宣言以降、三・一運動に積極的に参加し、支援していたのである。

その一方で、二・八独立宣言後の朝鮮基督教青年会の活動について「朝鮮人概況　第三(大正九年六月三十日)」(前掲)では次のように記述している。

本会ハ大正八年二月東京ニ於ケル留学生ノ独立運動以来一時休

会ノ状態ナリシカ同年十月ニ至リ例会ヲ催シ、幹事白南薫外四十余名会合シテ会費の募集、新来学生ノ歓迎、在監同胞慰安及新来鮮人ヲ保護スヘキコト等ヲ議シ大正九年一月十日第十四回定期総会ヲ開催シ爾来演説会其ノ他ノ会合ヲ重ネツヽアリ

朝鮮基督教青年会の活動は、二・八独立宣言後に一端休会したものの、大正八年十月に再び活動を開始し、翌年の一月からは演説会などを行うようになった。『現代』の発行は大正九年一月から始まるのであり、朝鮮基督教青年会の再出発と並行して進められたものと考えられる。

朝鮮基督教青年会は、休会中にどのような活動を行っていたのであろうか。「朝鮮人概況　第三（大正九年六月三十日）」（前掲）では次のように記述している。

昨年三月以来其会館ハ不穏学生ノ集会所ニ充テ或ハ印刷器具ヲ貸与シテ不穏文書ヲ印刷セシメ或ハ同会館宛海外及鮮内地同志ヨリ絶ヘス不穏文書ヲ郵送シ来ル等在京朝鮮人団体中最モ注意ヲ要スルモノトス（「在京朝鮮人ノ組織セル団体表（大正九年六月三十日調）」）

朝鮮基督教青年会館は「不穏学生」の「集会所」となり、海外や朝鮮内地から届く「不穏文書」の集配所となっていた。朝鮮基督教青年会は、二・八独立宣言後も、「海外及鮮内地同志」と連絡を取りつつ独立運動の火を絶やさないようにしていたのである。

拙論「研究ノート「文化政治」期の朝鮮語雑誌研究」[4]「研究ノート　朝鮮語雑誌『現代』の研究（二）—文化統治期の朝鮮語雑誌研究—」[5]において『現代』一号、二号（大九・二）、三号（大九・三）、五号（大九・五）、六号（大九・六）、九号（大一〇・二）の目次及び奥付を紹介したが、全ての奥付に「露西亜浦鹽斯徳市一三七／伊能孝書館」の名があがっている。推測になるが、朝鮮基督教青年会の朝鮮人留学生は、ソ連沿海州の「同志」とも連絡を取っていたのではないだろうか。

四

周知のように、日本政府は三・一運動を弾圧すると同時に朝鮮統治の方針を大きく変え、いわゆる「文化政治」へと舵を切る。朝鮮総督府発行（大十一年七月二十八日五版）の『大正十一年六月一日／朝鮮に於ける新施政』の「第一節　新施政の方針」では次のように述べている。

本官制改革の趣旨は、当時下賜せられたる詔書に明にして、内鮮を遇する一視同仁、文化的政治の確立に依り、半島の民生各其の所を得、其の生に聊し、休明の澤を享けしめらるるに在り。／大正八年九月二日、新総督、政務総監相率ゐて京城に赴任し、誠心誠意、日韓併合の本旨に基き、明治天皇、今上陛下の聖旨を奉体して、公明正大、著著文化的施政の確立を期し、其の訓示、諭告に於て、新施政の綱領を宣明する所ありたり。

「文化的政治」「文化的施政」と繰り返し述べられていることに、改革の方向性が明らかにされている。総督府はこのような方針の下に、朝鮮語による新聞・雑誌の発行をある程度自由にした。『大正十一年六月一日／朝鮮に於ける新施政』では、その理由について次のように記述している。

従来朝鮮内に於ては、諺文新聞の発行を制限したるも、如斯は言論の自由を制限し、民意の暢達上遺憾尠からざるを以て、京城に於ては、大正八年十二月より同九年一月に亙り、時事新聞、朝鮮日報、東亜日報等に発刊の認可を与へたり。是等の諸新聞は朝鮮諺文又は国文諺文併用にして、同年三月乃至四月に亙り発刊するに至れり、尚地方に於て発刊を認められたるものあり。

総督府は「民意」を「暢達」することを目的として新聞発行を許可したのであり、その結果、数種類の新聞が創刊された。しかしながら、現実は総督府の思惑通りになったわけではない。先の記述は次のように続いている。

然るに朝鮮日報及東亜日報は、動もすれば治安を妨害せむとする記事を掲載するを以て、総督府は数次警告を与ふる所ありしも、毫も其の態度を改むるに至らざるを以て、前者に対しては同年九月五日、後者に対しては同九月二十五日、発行停止を命令するに至れり。

総督府は、朝鮮語で書かれた新聞を発禁処分にせざるを得なかった。なぜなら総督府の警告を無視して、植民統治批判を続けていたからである。

この事から分かるように、総督府の言う「民意」とは朝鮮人の意見ではない。総督府が朝鮮語による新聞の流通をある程度自由にしたのは、総督府の考えを朝鮮人に知らしめることを眼目としていたのである。それが「文化政治」の意味するところであった。総督府は朝鮮語メディアを通して、宗主国に都合のよい朝鮮〈文化〉を作り出そうとしていたのである。それに対して朝鮮人の手による新聞が抵抗していたことは、飛躍を恐れずに言えば、宗主国との文化的な闘争を意味している。

他方、東京は、京城とはやや異なる知的環境にあったと考えられる。キム・サンは次のように往事を回想している[6]。

三・一運動が鎮静してすぐ後、私は日本で働きながら大学へ行こうと決心した。当時の東京は極東全体の学生のメッカであり、多種多彩な革命家たちの避難所だった。自国にはいい大学がないし、日本の大学にはその頃は自由な雰囲気があり戦後の知的興奮に満ちていたから、朝鮮の学生はみんな高等教育を受けに行きたがった。

東京は帝国の首都であると同時に、極東地域で最も知的刺激を受けることのできる都市であり、「知的興奮」に満ちていた。梶村秀樹氏によると、キム・サンは本名を張志楽と言い「日露戦争・日本

の侵略のまっただなかに生を享けた朝鮮人キム・サンは、三・一運動でめざめ、同世代の多くの青年たちと同様の思想的軌跡をたどり、勉学と闘争の場を中国に求め、やがてマルクス・レーニン主義者に成長していった」人物である。また梶村氏は「三・一運動の時には、本文によれば張志楽は平壌のキリスト教系中等学校に在学していたが、その終息後まもなく一九一九年夏頃（？）に東京に留学し、二〇年初頭（？）まで滞在したあと満州に行き」と述べている。わずか半年に満たない短い期間ではあったが、キム・サンは東京に滞在したのであり、その時の回想が先の一文にあたる。『現代』の創刊は一九二〇年一月のことであるから、キム・サンの滞在時期と重なっている。キム・サンの回想を参照すると、『現代』創刊号は「戦後の知的興奮」に満ちた時期に準備されていたことがわかる。

ここで大切なことは、京城で新聞メディアが総督府に抗っている一方で、帝国の中心であった東京で朝鮮独立に向けた思想的探求が行われ、『現代』が創刊されていたことである。京城、東京の双方で文化的な闘争が行われていたのである。

五

『現代』の記事を見ることで、三・一運動直後の朝鮮人留学生がいったいどのような思想に関心を抱き、どのように受容していたのかという点に光を当てることができるであろう。『現代』一号（一九二〇・一）に、金俊淵の「現代の使命」が掲載されている。その一節には、以下のようにある[8]。

軍国主義は、世界の流行児になってしまった。したがって、国家の最高目的は、軍備の拡張にあると言える。それ故、内治上、自由だの、平等だのと言っているが、外国に対して弱肉強食という獣性的衝動を、遠慮無く発揮するようになった。学者はこの国家の行動を弁護するために、様々な学説を案出して哲学的組織までも完成させた。国家の力による支配を弁護するのに、第一に必要な学説は、国家至上主義説である。国家と個人とは、行為の基準が異なると言う。個人の間では、殺人や財産を盗むことは悪いことであり、私たちの倫理学は否定しているが、これまでの私たちの政治学においては、これらの行為をむしろ愛国的な行動であると称揚した。力は権利という思想は、長い間、政治学の骨子になった。したがって、正直なマキャベリストは、国家の目的のためには、道徳を無視しても関係ないと、高唱力説した。日本のある学者の中でも、国家のためなら、人を殺すこともかまわないし、他の人の財物を略奪することも道徳であると極説した。

金俊淵の記事は創刊号の巻頭に置かれており、それなりに重みのあるものであると考えられる。この記事で金俊淵が批判しているのは、「国家至上主義」である。「国家至上主義」が、軍国主義を助長し、道徳を腐敗させ、植民地主義を正当化したと批判している。ところで、大正九年一月の『中央公論』に、吉野作造の「政治学の革新」が掲載されている。そこで吉野は次のように述べている。

正直なマキアベエリーは思ひ切つて、国家の目的の為めには道

徳を無視すべきことを高調力説して、臆病な世間を驚かしたけれども、旧い政治学は結局茲に落付かなければならぬ筈のものである。最近の悧口な政治学者は全然倫理道徳を無視していゝとはいひ切れ得なかつたと見えて、遂に国家の為めに尽すことが最後の善なりと云ふ一種独特の倫理説を立つるに至つた。故加藤弘之先生の如きは真に国家の為めならば人を殺すも可、人の財物を奪ふも亦道徳なりと云ふ風に極論されたと記憶するが、そこまでに至らなくとも所謂国家の為めにすること夫れ自身の上に絶対の倫理的価値を認めんとする誤謬を抱くものが多かった。

一読して明らかなように、金俊淵の記事と内容が重なっている。金俊淵については、松尾尊兊「吉野作造と在日朝鮮人学生」[9]が参考になる。詳しくは松尾氏の調査に委ねたいが、要するに金俊淵は東大法学部政治学科に在籍するなど、吉野とは近い存在であった。したがって、金俊淵は吉野の学説に通暁しており、援用したと考えられる。ただし金俊淵の記事は大正九年一月の掲載になっており、金俊淵が『中央公論』を読んでいたと考えることはできない。金俊淵は何等かの形で吉野の学説を知り、それを自らの議論に組み込んだと考えるのが自然である。

ただし金俊淵が吉野の思想に注目したのは、必ずしも近い存在であったからだけではない。松尾氏（前掲論文）によれば、朝鮮人留学生と吉野の間には交流があり、吉野は朝鮮人留学生の理解者と言ってよい当代随一の知識人であった。この点については、総督府高官であった丸山鶴吉の「朝鮮統治策に関し吉野博士に質す」[10]が示唆に富む。

吉野博士が現代思想界の一方の権威であり、而して亦朝鮮問題の熱心なる研究者にして、朝鮮青年の親厚なる友人なる事を知つて、私は平素極めて敬意を払ひつゝある一人である。博士は従来屢々朝鮮問題に就て意見を発表せられて居る。議論の正否は別として、之が為めに当路の人々は勿論、内鮮一般の人々が啓発された事は蓋し鮮少なからずと信ずるものである。

丸山は吉野が「現代思想」の権威であり、朝鮮問題に関する意見は少なからざる影響力を持っていると述べる。そして次のように吉野を批判している。

若し博士が朝鮮放棄論者でないとすれば、博士の論文は独り内地人のみに読まれるものでなく、朝鮮青年が喝仰して愛読するものであることを反省せらるゝ必要があると思ふ。陰謀は善事であり、独立運動は志士の仕業であると論断せらるゝ時に、博士一人は現在の朝鮮青年の心を惹付けることが出来やう、又崇敬の中心となられることが出来やう。

丸山は、朝鮮人留学生が吉野を尊敬して「論文」を熱心に読んでいたと述べる。金俊淵が吉野の論文を援用したことの背景には、吉野の政治思想に対する高い評価があったと考えるべきであろう。

しかしながら、朝鮮人留学生が、吉野の思想をどのように受容し

ていたのかと言う点については検証を要する。丸山の見方はあくまで総督府の視点からのものであり、朝鮮人留学生の視点に立つものではない。『現代』に掲載された金俊淵の記事はその点で参考になると思われるが、詳しい考察については別稿に委ねたい。

この点について考えるために、ひとつだけ参考資料をあげておきたい。それは、吉野の「朝鮮統治策に関して丸山君に答ふ」[11]である。この論文は、吉野が丸山の批判に応えたものである。この論文で吉野は「僕の趣意は朝鮮民族独立運動の根本的動機には道徳的なものが有ると云ふ点である」と道徳性を強調する。興味深いのは、吉野が「道徳」を「国家以上のもの即国家を指導すべき所謂超国家的規範」と述べていることである。吉野は、法的に見れば独立運動は許されないけれども、「道徳」的な見地からすれば「大いに其の心事を諒とする」と述べる。吉野は国家を超えた「道徳」を想定し、そこから朝鮮問題の解決を図ろうとする。そして吉野は同化政策を明確に否定した上で次のように述べている。

然らば朝鮮統治の理想は日鮮両民族の実質的最高原理に於ての提携でなければならない。此処に於て我々は彼等に臨むに、否彼等と我々との間の関係を規律するには、必ず普遍的な基礎に立つて一致提携を図らねばならぬ。特殊的の立場に於ては断じて融合は出来ない。日本の国法に反いてはいけないと云ふのが日本の立場である。祖国の快復を図ると云ふ事は、日本人たると朝鮮人たると支那人たるとを問はず、普遍的に是認せらる可き道徳的立場である。此処に共通な或る最高の原理を見ると云ふ事が即ち日鮮両民族の本当に一致提携すべき新境地を発見する事だらうと云ふのが僕の立場である。

ここで言う「最高原理」とは民族自決主義を指していると考えてよいのではないだろうか。吉野の言う「道徳」は、この「普遍」を容認する。しかし民族自決を「普遍」とするのであれば、朝鮮の独立は不可避である。吉野はそれを前提として、なおかつ日鮮の「融合」「提携」を図ろうとしている。なぜ、吉野はあくまで日鮮の「融合」を目指すのか、そしてなぜそれが可能であると考えるのであろうか。

吉野はこの論文の中で「云ふ迄もなく僕は日鮮融合提携を以て東洋平和の根軸であり、又日本の対東洋策の根帯であると考へて居る」と述べる。吉野は「東洋平和」は絶対であり、そのために日鮮「融合」は必要なのであり、また可能であると考えている。民族自決を日鮮が相互に承認し、「東洋平和」のために日鮮が「融合」するというのが、吉野の構想であると考えられる。

だが、ここで問われなければならないのは、朝鮮人が「東洋平和」のための日鮮「融合」という思想を共有することがあり得るのかということである。そもそも日本による朝鮮の植民地化は「東洋平和」のためであった。この事は、明治天皇の詔書に明記されている。その限りで吉野の構想は明治四十三年の日韓併合の思想を一歩も出るものではない。因みに、「日韓併合ノ詔書（明治四十三年八月二十九日）」[12]は次のような一節から始まっている。

朕東洋ノ平和ヲ永遠ニ維持シ帝国ノ安全ヲ将来ニ保障スルノ必要アルヲ念ヒ又常ニ韓国カ禍乱ノ淵源タルニ顧ミ曩ニ朕ノ政府ヲシテ韓国政府ト協定セシメ韓国ヲ帝国ノ保護ノ下ニ置キ以テ禍源ヲ杜絶シ平和ヲ確保セムコトヲ期セリ

天皇は「東洋ノ平和ヲ永遠ニ維持」し「帝国ノ安全ヲ将来ニ保障スル」ために、韓国を保護下に置くと宣言した。併合以降、韓国は「朝鮮」と呼ばれるようになり、天皇の下に直接統治されることになる。「朝鮮は天皇大権にもとづき植民地統治の委任をうけた総督が、独自に法律相当の令を発することができる異法域とされた」(海野福寿)[13]のである。はたして朝鮮人留学生の目に、吉野の言う「東洋の平和」はどのように映し出されていたのであろうか。

金俊淵は吉野の学説を援用しつつ、国家主義を批判した。しかし、金俊淵の国家主義批判は、専ら日本帝国の植民統治批判に向けられていたと考えられる。だとすれば、脱植民地主義の思想である。これから先は今後の課題であるが、『現代』の記事を読み解くことは、朝鮮人留学生の思想動向を明らかにすることであると同時に、帝国の思想がどのように脱植民地主義の思想へと変容を遂げていたのか(あるいは変容していないのか)という点について考察する意味もあることを言い添えておきたい。

(参考資料)

現代의使命 (金俊淵)

軍国主義라하는것은 世界의流行児가되얏다 말아서 国家의最高目的은 軍備의拡張에잇는것갓치되얏다 그런故로 内治上에는自由니平等이니하지만은 한번外国에対하면 弱肉強食하는獣性的衝動을 念慮업서発揮하게되얏다 諸学者는 이国家의行動을 弁護하기為하야 엿러가지学説을案出하고 哲学的組織까지도 完成하엿다 国家의強力을弁護하는데 第一必要한学説은 国家至上主義説이다 国家와個人과는 行為의標準이달으다고말한다 個人間에 殺人하며 盗賊질하는것은 낫분일이라고 우리倫理学은否認하지만은 在来의우리政治学에서는 此等의行為를 도로혀愛国的行動이라고讃揚하엿다 힘即権利라 하는思想은 오래동안 政治学의骨子가되얏섯다 그러함으로 正直한마캬버리는 国家의目的은為해서는 道徳을無視하드래도 関係업다고 高唱力説하엿다 日本어느学者中에도 참으로 国家를為하게될러이면 사람을죽이는것도좃코달은사람의財物을奪取하는것도 道徳이라고極説하엿다

注

(1) 『現代』に直接関わることではないが、「金若水の渡日と『大衆時報』創刊—日本における朝鮮人社会主義勢力の形成に関する一考察—」(『在日朝鮮人史研究』第三八号二〇〇八・一〇)も参考になる。

(2) 『朝鮮独立運動の群像』(一九九八・六 青木書店)

(3) 朴慶植『朝鮮三・一独立運動』(一九七六・一一 平凡社)

(4) 『金沢大学国語国文』第三二号 平成一九年三月

(5) 『金沢大学国語国文』第三三号 平成二〇年三月

(6) 『アリランの歌 ある朝鮮人革命家の生涯』(二〇〇七・四

岩波書店）

（7）前掲『アリランの歌　ある朝鮮人革命家の生涯』「解説」

（8）日本語訳するにあたって朴貞蘭氏（名古大学大学院　博士研究員）にご協力いただいた。なお原文については、本稿の末尾に記した。

（9）『民本主義と帝国主義』（一九九八・三　みすず書房）

（10）『新人』一九二〇・三

（11）『新人』大九・三

（12）前掲『大正十一年六月一日／朝鮮に於ける新施政』所収

（13）『韓国併合』（一九九五・五　岩波書店）

【付記】

（1）引用にさいして、旧字体は適宜新字体に改めた。

（2）本稿は、平成二十三年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「大正デモクラシーと朝鮮語雑誌―日韓交流の文化史―」（課題番号21520224）の成果の一部である。